

創り・伝え・能動的に学ぶ「ブロードバンド子ども放送局」

— 発信体験・受信体験から伸びるメディアリテラシー —

兵庫県立教育研修所 情報教育研修課

IT教育推進研修員 井口 浩一

hiiguti@hyogo-c.ed.jp

キーワード：ブロードバンド、イントラネット、メディアリテラシー、双方向性、能動的な学び

1. はじめに

龍野市では、平成 13 年 10 月から「地域イントラネット基盤整備事業」(総務省補助事業)により、地域イントラネットが整備された。このネットワークは、光ファイバーを利用し、市内の各小中学校と教育委員会が高速回線で結ばれていることが特徴である。「ブロードバンド子ども放送局」とは、ブロードバンドネットワークを活用し、子どもたちが制作した番組を配信・受信するシステムである。発信体験・受信体験を通して「何を」「どのように」伝え合い、表現していくかに着目し、子どもたちのメディアリテラシーの伸長を図るとともに、「能動的な学び」を支援するためのポータルサイトを構築した。龍野市には、小学校 7 校、中学校 2 校がある。少子化にともない単学級の学校も増えてきている現状において、「ブロードバンド子ども放送局」を通して多くの友だちと交流を深め、ヒューマンネットワークを広げていくことは、地域の良さに気づき、生きる力を育むことにもなる。

2. 実践の概要

(1) 対象

龍野市内小学校 1 ～ 6 年生、学校数 7 校

(2) 内容

「ブロードバンド子ども放送局」を立ち上げる。これは、子どもたちが企画、取材し、学校にあるメディア機器を使って制作した番組を地域イントラネットで配信し、生放送(Live 放送)または、ビデオ・オン・デマンド(VOD)として各学校で視聴できるものである。子どもたちは、それぞれ特色ある番組を配信、受信するだけでなく、双方向性をもつ番組づくりをめざし、支援 Web サイトでのアンケートや電子掲示板を交流や相互評価の場として活用した。これらの活動を通して、子どもたちが視聴者の立場とともに制作者の立場をも体験できるように意図した。(図 1 参照)

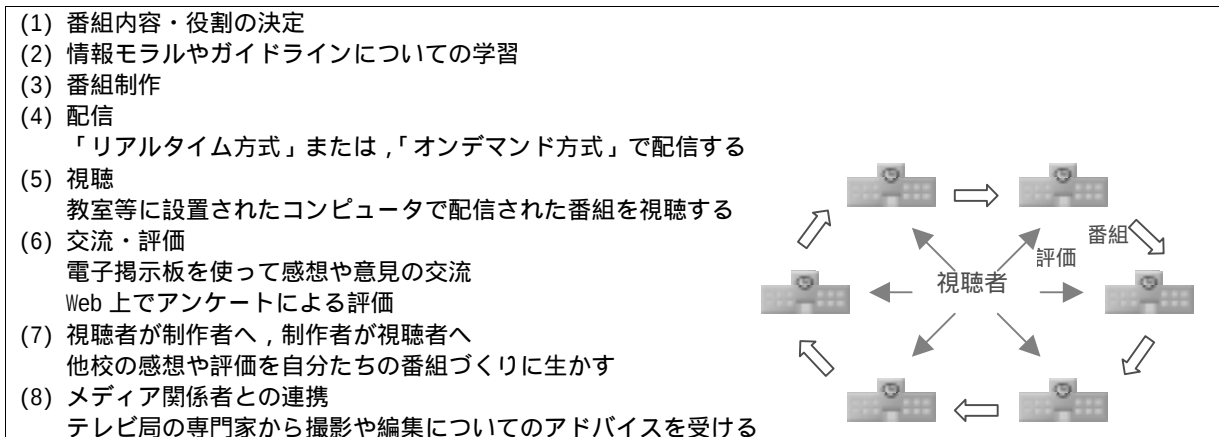


図 1 児童の学習過程

3. 「ブロードバンド子ども放送局」を支えるシステム

(1) 配信・受信システム

基本的なアプリケーションがすべて日本語化されているという扱いやすさから Windows Media Technologies によるシステムを使用し、既存のコンピュータと新たにサーバ、エンコード用のコンピュータを用いて、図 2 のように龍野市小・中学校 9 校のイントラネット環境を利用した配信・受信システムを構築した。

(2) 支援 Web サイト

児童の番組の送受信ならびに電子掲示板やアンケートへの書き込みを容易にし、児童や指導者の交流と活用を支援するための Web サイトを開設した。サイトの構成や Web ページの作成にあたっては操作性やデザインにも留意した。

(3) 情報教育担当者会との協力体制

「ブロードバンド子ども放送局」の運営に関して、コンピュータの設定変更や放送の日程調整、授業者への支援など、情報教育担当者会の協力が必要となる。定期的に話し合いの場を持ち、研究の趣旨説明や機器操作の研修、活用方法の検討、活用状況に関する情報交換などを行った。

個人情報や著作権の取り扱いについても情報教育担当者会で協議し、「ブロードバンド子ども放送局」利用に係る個人情報保護のガイドライン「ブロードバンド子ども放送局」利用における著作権保護のガイドラインの二つを作成した。

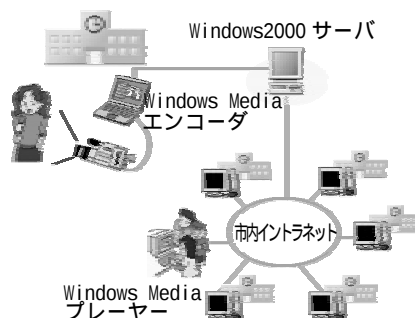


図2 配信・受信システム

4. 実践事例

学校名	番組タイトル	内 容
A 小 (6 年)	江戸から東京へ	社会科で調べてまとめた江戸から東京への歴史の流れを、ペーパーサートを使って紹介する。
B 小 (3 年)	スーパー東 「公民館学習をして」	社会科、総合的な学習の時間で校区の公民館について調べたことや、子どもたちの考える未来の公民館について発表する。
C 小 (3 年)	クリスマスジャズコンサート にきてね	社会科、総合的な学習の時間で校区の公民館について調べたことや、校区の集会所で行われる「クリスマスジャズコンサート」への参加の呼びかけをする。
D 小 (5 年)	私たちが考える 理想の近未来カー	社会科で自分たちが考えた理想の近未来カーを紹介し、どの車が一番よかったか視聴者に投票してもらう。

図3 配信された番組

配信された4校の番組内容を見ると、どの番組も教科や総合的な学習の時間での学習成果を番組にしたものである。(図3)

発信者としての児童は、番組内容はすでに決定しており、「ブロードバンド子ども放送局」というメディアを通しての表現方法の工夫に重点を置くことができた。受信者としての児童においては、同じ内容を学習していることで、内容や伝え方に対しての視聴する視点が定まり、より番組内容への興味・関心につながったといえる。



図4 番組配信の様子

5. 成果と今後の課題

(1) 創り・伝え・学ぶことの楽しさの体験

各学校の番組を視聴した児童の約80%が、自分もやってみたいという番組制作への高い関心を示した。番組の内容に関しても多くの児童が興味・関心を持ち、もっとくわしく知りたいと感じていることが支援 Web サイトでのアンケートや電子掲示板への書き込みから読み取れた。

(2) 児童のメディアリテラシー

受信者としての児童は、発信者(作り手)としての経験を踏まえ、メディアの特性をより意識したアドバイスをを行った。このような、相互評価の高まりが児童の伝え合う力を育み、高めるのである。さらに、他の児童が行ったアドバイス内容が番組制作にどのように生かされているかを確かめることによって、主体的な視聴態度が生じ、解釈の深まりと広がりにつながっていった。

また、創ることによって、児童が今まで見てきたテレビや映画等、いわゆる映像と音声(音楽)を通して伝えられるメディアの仕組みやしかけが体験を通してより深く理解できた。これは、情報を伝達するメディアそれぞれの特質を理解する能力の伸張と、メディアを通してよりよいコミュニケーションを作ろうとする意欲につながったと考えられる。

今後、児童が主体的に番組にアクセスし双方向の番組づくりを行うためには、休み時間等を活用して自由に支援 Web サイトにアクセスできる環境が構築されることが望まれる。また、子どもたちの発達段階に合わせた支援 Web サイトのインターフェースの改良や、各校の教育課程や情報教育の「めあて」をふまえて、指導者へ活用場面をアドバイスしていくことも重要である。